

元駐ルーマニア大使小崎昌業氏オーラルヒストリー（二）

— 中華民国・インド・カナダ時代

金子 貴純

はじめに

本稿は、元駐ルーマニア大使小崎昌業氏オーラルヒストリーの続編である¹。今回は、いよいよ、外交官としてのキャリアをスタートさせるところからお話しが始まっていく。

アジア局第二課における研修を経て、小崎大使が最初に配属されたのは中華民国であった（1953年4月）。大陸からのプレッシャーにさらされていた中華民国で、小崎大使は、「中共情報」の収集に従事された。大使のお話しは、中台関係が極度に緊迫していた状況において、現地外交官により行われた情報収集活動の実態を我々に伝えてくれる貴重な証言である。

台湾での任務を終えた大使は、経済問題の習得を志して出向した通産省での勤務を経て、1960年10月、カルカッタ総領事館に着任された。そこで語られるのは、今なお続く陛下（当時は皇太子）との交流や、シッキム王室との関係、ネパールにおける開発など、戦後の日本が、東南アジアとの関係の再構築を模索する過程において、先兵の役割を果たされた日々である。

カルカッタにおける勤務を終えた大使は、1963年10月、カナダ大使館に赴任された。いまだ十分に理解されていない日本の真の姿を、現地の人々に話してまわった経緯は、「広報外交」を裏面で支えていた人々の活動を我々に伝えてくれる。

情報に経済、開発、そして広報。本稿で語られる小崎大使の八面六臂のご活躍は、独立後、高度成長へと向かう当時の日本の躍動感とそのまま重なるものがある。

末尾になるが、小崎大使とのインタビューのセッティングに尽力してくださった、愛知大学東亜同文書院大学記念センターの武井義和先生に感謝申し上げたい。

インタビュー内容

（以下、〔 〕で記載している箇所は筆者が適宜追加した内容を示す。）

¹ 前編の内容については、金子貴純「元駐ルーマニア大使小崎昌業氏オーラルヒストリー（一）— 青島・上海・南京時代から外務省入省まで」（『大東法政論集』第26号、2017年、83-111頁）を参照されたい。

第3回

日時：2014年12月12日 14:00～16:00

場所：愛知大学東京霞が関オフィス

インタビュアー

武田知己（大東文化大学法学部教授）

金子貴純（大東文化大学大学院法学研究科博士課程前期課程）

（前編からの続き）

■ 中華民国における情報収集任務 1953年4月-1956年3月

— 研修後の最初の配属先はどこでしたか。

小崎 本省です。当時は中国課とは言わず、アジア局第二課と言っていました。そこでは、中国、台湾、韓国を扱っていました。我々は実務より研修の方が多かった。専ら調書を作っていました。

— 当時のアジア局長はどなたでしたか。

小崎 誰だったかな〔倭島英二²⁾〕。

— 課長さんは覚えておられますか。

小崎 課長は覚えていません〔広田稔³⁾〕。

— どのくらいアジア局にいらっしゃったのですか。

小崎 1年もいなかったと思う。

— 台湾に行く事は事前にわかるものだったのでしょうか。

小崎 研修所にいる時からわかっていました。中国関係者は私一人でしたから。

— 〔外務省入省者の名簿を見ながら〕ハルピン学院という方がいらっしゃるのですが…。

小崎 ハルピン学院の人も愛知大学に入りましたよ。

— ハルピン学院は大学にあたるものですか。東亜同文書院のようなものだったのでしょうか。

小崎 これは同文書院よりは一つ下です。大学にはなっていなかった。そこではロシア語をやっていました。私は中国語で入ったものだから英語がへたくそで、イギリスに行きた

²⁾ 外務省職員録 昭和28年2月1日現在』（外務省官房人事課、1953年）。

³⁾ 同上。

いと思って希望を出したら、「お前は台湾行きだ」、と。当時は中国と国交がなかったですから台湾に行くわけです。日本からもお偉方がどんどん台湾に来ましたよ。

— それまでに台湾に行かれたことはあったのですか。

小崎 ないです。初めて行きました。

— どうやって行かれたのですか。

小崎 飛行機です。沖縄でいったん給油して。小さい飛行機でしたけれどね。

— 大使館は台北のどちらにあったのですか。

小崎 台北の中山楼。今とは場所が違います。

— 行かれた時の大使はどなたですか。

小崎 芳沢謙吉氏です。芳沢さんは古い人でしたけど元気でした。

— 芳沢さんがいたり、張群がいたりで、戦後とは思えませんね。この頃芳沢大使はおいくつくらいでしたか。

小崎 80歳くらいでしょう。

— 芳沢大使は新潟のご出身ですよ。蔣介石も張群も高田連隊にいましたから、そういうことを考えて芳沢大使を選んだのでしょうか。

小崎 さあどうでしょう。芳沢さんは奥さんを亡くされて、台湾で結婚されたんですよ。いい奥さんでしたよ。

— 他には大使館にどのような方がいらっしゃいましたか。そもそも人員は多かったのですか。

小崎 大きさは中規模でした〔小崎大使が着任した1953年度は11人体制⁴⁾〕。大使が芳沢さんで、参事官が清水董三さん。参事官はもう一人いたんだけど誰だったかな〔木村四郎七⁵⁾〕。

— 清水さんも戦前から活躍された方ですからね。国府との付き合いも深かったでしょうし。

小崎 清水さんは字がとてもうまかった。

— 大使館の組織はどう分かれていたのですか。

小崎 総務課と経済班と領事班と、そんなものでした。総務課の政務班で政治関係もやっていた。小さい大使館で、机並べて仕事していますから、組織を分けてもあまり意味

4 『外務省職員録 昭和28年4月1日現在』（外務省官房人事課、1953年）。

5 同上。

がないのだけれど。経済班は独立してやっていました。

—— 大使は何班に所属されていたのですか。

小崎 政務班です。

—— 具体的にどういったお仕事をされていたのですか。

小崎 蔣介石の大陸攻勢に関する情報収集。その情報を電報で打ったら、東京は、初めのうちは信用しないんですよ。そんなの向こうが漏らすはずがないと言って。

—— どういった内容だったのですか。

小崎 内容は忘れましたが、要するに、いつから台湾がどこを攻撃してどこを占領するか、機微な電報でしょう。本省が信用しないから、また同じような内容の電報を打った。そうしたら、誰からどういう経緯で情報をとってきたのかと言ってきたから、回答したら信用したらしく、次からは黙って受け取ってくれました。

—— どういう風に情報を取るのですか。

小崎 それはなかなか取れないですよ。私は終戦後上海にいましたが、当時は中国共産党政府の中に国際問題研究所というのができて、そこへ入れと。そのうち重慶から〔国民党側が〕どんどん出てきて、兵隊をやめて、民間の一般人になっていて、〔日本側と〕接触が出てきます。そのうちに、日本人の中にも現地に残ろうという人も出てきます。そういう流れの中で中国人と接触が出てきて、中国国民党の中にできた対日文化工作委員会というものに入れというから、名簿みたいなものをもらいました。実際は、大陸では日本軍は安定していたので、それまで武器弾薬はこちらがおさえていました。その後、蔣介石軍が渡してくれというのでそうしたのです。それで向こうは、それを多として、いろいろな交流があったわけです。

—— 大使も武器の引き渡しに関わられたのですか。

小崎 多少はありました。

—— 台湾に行かれてからも、大陸におられた頃の人脈があったのですね。当時の台湾には、上海で接触のあった方もいたのですか。

小崎 その一味はいましたよ。もうずいぶん経っていましたが、お互いわからなかったけど、接触するうちに「おお、お前こんなところにいたのか」と。そのうちに情報をくれるようになりました。

—— 情報を取るときは中華民国の人と接触するわけですよ。

小崎 こちらも取った情報の内容を忘れるのですよ。情報取りというのは酒飲みながらや

るから。こっちは、「情報取ったら外務省に送ります」といってやるのではない。わいわいと酒飲んでいる間に情報が入ってくるわけです。私がよくやったのは、酒飲みについて、その後二次会に行くんですが、いっぺん家によってメモしていくのです。必要に応じて電話したりもしていました。メモして、それからまた出かける。そんなことをよくやりましたよ。そうしないとみんな忘れてしまうから。今はだいぶ変っているかもしれませんが、昔は全部そうでした。

— 大使は中国での経験もおありですし、言葉もできるし、信頼されてスムーズに関係を築かれたのではないですか。

小崎 そうでもないんですよ。中には日本を知らない連中で、大陸から渡ってきたのが課長でいたりしましたから。ただ当時は蒋介石の対日感情はよかったですよ。日本の旧軍人からなる白団という団体を作って使っていた。蒋介石は日本軍を信頼していたのです。金門・馬祖の砲撃の時、アメリカが第七艦隊を海峡に送った時には、アメリカは日本を信用していなかった。ところが、蒋介石は日本軍を自分の顧問団にした。60名から70名くらい、陸大出が入っていたのです。そして将官を6000名か8000名育てたのです。それで、蒋介石は、「日本軍は優秀だから信頼して間違いない」と書き物にも残しているし、そう講義もしています。

— 台湾で蒋介石が政権を取った時には、基本的にみんな大陸から来るわけですよ。かなりどっと来るのですか。何千人、何万人という単位で来るのですか。そうすると台湾の中で軋轢が生じたりするのではないですか。

小崎 私が行った時はものすごい軋轢が残っていました。二・二八事件で数万人が殺されましたから。とにかく台湾の人たちは、大陸からきた人間を毛嫌いしていました。

— それは肌でわかりますか。

小崎 最初台湾人と中国語で話していると、相手はものすごく無愛想だった。それで実は日本人だと言うと、「ああ、日本人ですか」といっぺんに変わる。顔が同じだから、はじめは外省人だと思っているから本当にすごい顔をしている。台湾人は本当に我々に愛想がよかった。台湾にいる時はいろいろな付き合いをしましたよ。特別の便を取って日本に行く世話をしたり、いろいろなことをやりました。日本に来て日本で亡くなった方もいましたけれど。

私が台湾に行く直前に、台湾から経済使節団が日本に来たのです。どこかで宴会がありまして、団長が台湾人でした。その人は日本語がわかる。私は「台湾で合いましょう」と

別れた。そして私が台湾に行って、その人の消息を尋ねたらいらないのです。何かのスパイの嫌疑でぶちこまれていると。その後どうなったかはわからない。そういうケースがざらにありましたよ。台湾ではちょっと頭を出した、有力な人はもろにやられる。

—— 有名な事件もありましたよね。たとえば、孫立人事件（1955年）です。ちょうど大使がおられた頃かと思います。こういった政治的事件が何千件とあったようですね。そのような中でも、庶民の生活は普通に営まれていたわけですか。ずっと戒厳令が布かれていましたが。

小崎 戒厳令は常時布かれていましたね。戒厳令が布かれているいい例は、公共食堂で目にした出来事です。「公共食堂」という名前は非常にかたい。ところがそこに入ると立派な女性がいて、宴会をしている。真ん中はダンスができるようなホールになっていて、各地にそういう所がいっぱいある。初めは公共食堂というから一般の食堂かと思っていたら、さにあらず。何でこんなことするのかと思ったら、蔣介石の命令だという。

あと、私は台湾人の家庭にはよく世話になって、ごちそうになったりしましたが、日本人には本当のことを言ってくれた。でも外省人は蛇蝎のごとく嫌われていた。あの頃は事件が多発していましたから、我々もよく巻き込まれました。それと台湾では、台湾大学に半年間行っていたことがある。本当は我々の身分だと少なくとも1年、長い人は2、3年は向こうで勉強できたんです。でも私は向こうへ行った日から、暗号電報の解読で毎日暗号と格闘していました。

—— それほど忙しかったのですか。人が少なかった…

小崎 人はそれなりにいたけど、暗号ですから、人に任せるわけにはいかない。その時に知ったのは、大学の中に円形の公園みたいになっているところがあって、そこに店が並んでいるんですよ。そこで食事ができる。行きつけの店がありますから、遅くなっても、おやじさんも奥さんもいい人で、「よく来たな」といってごちそうしてくれる。私が食事していると、次第にまわりの人が集まってくる。そこで一緒に食べて飲んでいると、「日本時代はよかった」と言っていた。しまいには、知らない人の家に泊められたこともある。朝、目を覚ましたら、全然知らない家だった。そうしたら、夕べのおやじさんの家だったりしました。

—— 台湾には日中戦争以降、皇民化教育が行われて、若干の抵抗運動が戦時中にあったようですね。そういう中で日本人が戦後台湾に行くのも大変ですけど、その一方で、外省人が来ていろいろな亀裂や軋轢があって、そういった時に日本人が外務省の役人として生

活するのは大変だと思うのですが。

小崎 その時は日本人も少なかった。商社の人はいくらいたけれども、それ以外は旅行者もいなかった。今と違いますよ。

—— 一番大きな亀裂は外省人と台湾人との間の亀裂なのでしょうね。

小崎 そうです。その亀裂が大きくて、溝は埋まらないかと思っていましたが、だんだん埋まってきましてね、最近では外省人という言葉は聞かれなくなってきました。

—— 最近の台湾の統一地方選（2014年11月29日）でも国民党はよい結果が出ていません。やはり共産主義は嫌なのでしょうか。

小崎 結局、一番対日感情がいい国は今や台湾ですよ。

—— 台湾におられた時に、何か大きな事件などを担当されたことはありますか。

小崎 大きい問題では日本の国連加盟問題ですね。この頃は台湾が中国を代表していました。1955年の国連総会で、ソ連はモンゴルを含めて日本を除く16カ国一括加盟案を提出して、西側は右の案に日本、スペインを加えた18カ国案を提出して、国連の舞台裏の激しい工作によって、18カ国案は実現しそうになった。ところが中華民国は米国、日本からの懸命な説得があつたにもかかわらず、モンゴル加盟に絶対反対の方針を変えずに拒否権を行使して18カ国案はつぶされた。これをみて、ソ連はモンゴル、日本を除く16カ国案を緊急上程して、米国はただちに16カ国案に日本を加えることを提案したけれども、ソ連が拒否権を行使して、結局16カ国は加盟して日本は落ちました。翌年1956年10月、日ソ共同宣言への署名によって日ソの国交が回復し、右の宣言でソ連は日本の国連加盟を認め、11月の総会で日本の単独加盟が実現した。これがサンフランシスコ平和条約発効後4年半後の出来事だった。戦後11年目のことです。ソ連ではスターリンが死亡し、フルシチョフがスターリン批判を行っていた、そういう頃です。

—— 大使はそういう情報を取るのがお仕事だったのですか。中華民国が国連の場で賛成するとかしないとか。台湾がモンゴルの国連加盟を拒否することはわかっていたか。

小崎 わからなかった。

—— 国民党の意識としては、モンゴル人民共和国は中国の一部ですか。

小崎 ついこの間まで、モンゴルには大モンゴルというのがあって、内モンゴルは中国側がはなさなかった。その外側のモンゴルは独立したわけです。1921年です。そして私がモンゴルに行っていたころは〔1982年9月に特命全権大使としてモンゴルに赴任〕、顔はおなじ顔をしているけれども、米ソ対立の時代ですからね、モンゴル人が日本人を見つけ

るとけんか腰なんです、普段は。けれども、腹の中はそうではないとわかっているから、我々もモンゴル人が喜ぶようなことをやったわけです。それが今になってはわかるけれども、当時はわからなかった。あの頃は、西も東もアメリカ側かソ連側かで色分けされていきましたからね、とにかく住みにくいというか住みやすいというか。変な時代でした。そういう空気の中で我々は生きていました。

— 台湾時代にアメリカとの接触はありましたか。

小崎 あまりなかったです。金門・馬祖の時も少なかった。

— アメリカの台湾政策は情報として入ってくるのですか。

小崎 黙っていたら入らない。そういうのはこちらから取らないと入らない。そういう情報を取るのは大変だから、当時はアメリカの大使館はあったかな。軍隊はいたけれども。あれは 1953 年か、その頃から蒋介石は、大陸反攻を呼号して、金門・馬祖との間で砲撃戦が絶えなかった。

— 1954 年には、インドシナ紛争がジュネーブ協定で休戦になりました。東南アジア情勢はどうでしたか。台湾の大使館は全然関係がなかったのですか。

小崎 全然関係ないわけではなかったけれども、積極的に動かないと、情報は自然に入ってくるものではなかった。私も台湾在勤中に 1、2 回外に出たことがあります。シンガポールとパキスタンに行きました。大使の御供でね。そのころは、シンガポールやインドネシアの大使館には、同文書院の先輩がたくさんいましたよ。時々出張して教えてもらいました。中国大陸には行けないものだから、東南アジアに出したのでしょうね。

— 中共の情報も取りますか。

小崎 取ります。けれども、情報はいい加減なもので、確かなものかどうか確認できなかった。でも、相手が「核心的な情報だ」といつてくれたものを東京に送りました。その一部が厚い本になっています。外務省にある「中共分析」という本です⁶。そこに私が送った電報が一部入っています。どこにあるかはわかりませんが、外務省にいた時に見たことがあります。

— 中共の情報をくれるのは外交部ですか。

小崎 そういう所と接触してもいいけれども、あまり喜ばれない。だから、私が接触する

⁶ 大使が中華民国にいた時代に、外務省アジア局第二課が編纂した冊子で、確認がとれたものは次のとおりである。『中共総路線に関する一考察 社会主義国家建設に関する基本政策の分析』（1954 年）、『中共の対外工作』（1955 年）、『中共経済の現状分析』（1955 年）。

のは、軍人とか、外交部から少し外れたところにいる人物ですね。

— 蔣介石が戒厳令を布いた一つの理由は、共産主義者がいたからですよ。

小崎 いや、そうではなくて、蔣介石は向こうから追い出されたわけですから。だから大陸は取り返すと言っている。要するに、5年かけて大陸を取り返すとスローガン掲げてやっていた。その最中だから、蔣介石は必死だったのでしょう。

— 台湾にも共産主義者はいましたよね。

小崎 あの頃はいなかった。いても微々たるものでした。

— ところで、情報を東京に送る、送らないという意味決定は、大使館の中ではどうやって行われていたのですか。

小崎 大使決裁です。大使がはじめはなかなか許可してくれない。

— それは情報を出すなどということですか。

小崎 そう。私がとってきた情報を大使が信用しない。こんな情報とれるはずないじゃないかと。本省も信用しません。そのうちに東京からも、[大使館の中で] ごたごたしていると、怒りの電報が来るわけです。だからこちらも本当のことですから、うそをついているわけではないと言って大使を説得して、電報を打って、やっと通りました。

— 大使が台湾におられた頃の出来事ですが、バンドン会議は覚えていらっしゃいますか。

小崎 はい。岡田さんが通訳として行っていました。

— その頃、外務省、大使館は、蔣介石の大陸反攻は成功すると思っていたのですか。

小崎 実際上は困難でしたけど、ただアメリカ軍が台湾を信頼していましたから。第七艦隊を台湾海峡に出して、大陸と遮断しました。あと、金門・馬祖も日本軍の生き残りが助けていますからね。白団の連中が指導して。台湾軍が三千人くらいで、中共軍は三万もいたのに、それを2、3日で撃退したわけですから。その後は、中共軍は攻略しに来なくなった。日本軍がそれくらい腰をいれてやると、台湾軍もしっかりやった。我々が宴会をやっていると、時々爆撃の音がしたものです。

■ 日台関係をめぐる人々

— 日本には親台湾派がたくさんおられたと思いますが、特に親しくされた方はいらっしゃいましたか。

小崎 三木武夫氏あたりが来ると大変でした。また、大使館、商社、新聞社には同文書院の同窓が多かった。それから、台湾出身の同文書院の同窓もいました。私は42期でした

が、42期には3人、43期に1名ほどいました。あと周文福というのが政府系機関にいました。楊清輝というのは自立していました。台湾人を教育して世界に羽ばたかせるんだと言ってスローガンを掲げて、教育機関を設けていました。それから43期の張溪祥というのは銀行に入っていました。16期の林伯奏とその息子の林仲秋は、二人とも自分で商売をしていました。息子の方は、今はアメリカに行っています。

— 今あげられた中で、大使館の仕事としてお付き合いのあった方はいますか。

小崎 とくにありません。

— その後大使が堀内さん〔堀内謙介〕に代わられますね。どんな方でしたか。

小崎 そうです。昔の大使だから悠々としていましたね。戦前の人ですし。オーストラリアやカナダにも行ってましたね。

— 最初の芳沢大使の前の木村四郎七さんが一番最初ですね。事務所の頃ですね。

小崎 そうです。木村さんが参事官で、後に大使になりました。

— その間に大使は台湾を離れられますね。

小崎 そうです。あと芳沢謙吉さんは、私をよくゴルフに連れて行ってくださいました。私は台湾で始めてゴルフクラブを握ったのですよ。下手だけれど大使がゴルフ好きだから。当時は土曜日にも仕事がありましたから、食事は大使公邸で食べていっていいから、と言って、私をよくゴルフ場に連れ出しました。それで大使と私の下手くそが二人でやるものだから、まわりはいやがっていました。どこにボールが飛んでいくかわからないから。だから、「大使とゴルフをする時には言ってくれよ」と言われていました。

— 台湾側の要人ともやったのですが。

小崎 何応欽はゴルフをやりました。ゴルフ場ではスマートな服を着て、にこにこして上機嫌でした。あまり上手ではなかったけれども。張群はやらなかった。あの頃は私もまだチンピラだったから、要人とゴルフはあまりやらなかったけれども、まあ一般的にゴルフは流行っていなかったですからね。でも、台湾でゴルフをやったということは後で助かりました。どこに行ってもゴルフはみんなやりますから。

— 大使は台湾には3年おられたわけですが、3年という期間は普通ですか。

小崎 普通です。

■ 通産省への出向

— その後いったん本省に戻ってこられるのですね。

小崎 そうです。私は経済がわからないものだから、経済を知りたいと言ったら、それでは通産省に行けということになりました〔1957年は通産省通商局輸入第一課軽工第二係長、58年は同課求償貿易係長、59~61年は標準外仲介貿易係長⁷⁾〕。あの頃、外務省の人間は通産省にたくさんいました。他に行くところがなかったから。当時は独立後間もなく、それほど途も開けていなかったです。だから、通産省なら受け入れてくれるので、通商局は局長以下、どっさり行っていました。

— 経済を勉強したいというのは何か理由があったのですか。

小崎 台湾にいた時に、情報ばかりやっていたから、経済の話しがとてもわからなかった。それで経済を勉強したいなど。

— 日華貿易協定（1956年）が結ばれた頃ですか。ご記憶はありますか。

小崎 私は直接はタッチしていません。

— カルカッタに行かれるまでに何年くらいおられましたか。

小崎 割合長いです。4年ですか。

— カルカッタに行かれる前に、通商局では何をされていたか。

小崎 通商局には輸入第一課というのがあって、特殊貿易をやっていました。本当は経済の真髄ではないのですが、あの頃はそういう貿易の金額が大きかったのです。普通のインポートライセンスに特別のはんこを押して、特別の署名をして、それで取引ができるようにする。そういうことをやりました。

— 品物はこういったものでしたか。

小崎 品物の実際は知らないです。紙の上での処理だけでしたから。銅とか鉛とか、ヤシの油、繊維、綿花でしょうか。

— 1962年からはインドですね。ここからは次回にさせていただきます。今日は本当にありがとうございました。

第4回

- ・日時：2015年1月23日 15:00~17:00
- ・場所：愛知大学東京霞が関オフィス
- ・インタビュアー

⁷⁾ 以上の経歴については、『全官公庁便覧』（日本週報社）の昭和32年度版から36年度版までを参照した。

武田知己（大東文化大学法学部教授）

金子貴純（大東文化大学大学院法学研究科博士課程前期課程）

■ 中華民国大使館の組織と人物

— 前回の台湾時代の補足からさせていただきます。大使館の人員・組織について、もう少しお話しいただけますか。

小崎 日本人の職員は8名か9名くらいいました。その中に同文書院出身者が3名いました。大使の公邸は離れたところにあるのですが、用がない時は公邸にいまして、私は大使の使いをやっていました。その他に総務の部屋がありまして、その時は同文書院の中田豊千代さんがヘッドでした〔一等書記官〕。その下に総務の仕事をしているのが2人、私を含めて3人いました。あと現地の職員もいました。それから経済室があつて、通産省からきたヘッドがいました。その他に現地の職員が2名いた。それとは別に、ビザを発行する仕事をする領事室があつて、そこにヘッドと現地職員がもう一人いたと思います。あと、それとは別に参事官室があつて、参事官がいました。ヘッドは同文書院の清水董三さんでした。非常な文化人でして、絵を描いたり、字を書いたりして中国人もびっくりしていました。あと運転手が2名いました。

— 現地職員というのは台湾人ですか。

小崎 台湾人です。

— 日本語もできるのですか。

小崎 できます。

— 国民政府側の人物で、よく接触した方がいたと前回もおっしゃっていましたが、基本的には総務が接触するのですか。

小崎 そうです。

— 総務というのは経済・領事関係以外の、政治関係の仕事をやっていたのですか。

小崎 そうですね。私は総務と、大使の秘書をやっていました。他にも、私が台湾側と接触しているうちに情報が入ってくるようになりました。それは台湾の外務省ではなく、別の機関から情報をとった。台湾に行く前に、私は上海で国民党政府の機関に入って、途中で喧嘩して帰って来たのですが、その中に呉仲謀というのがいた。彼は軍人でした。私が台湾に行ってから、どこかで接触しまして、そのうちに情報をくれるようになった。非常に親しくなって、情報をもらいました。

あと、接触があった中国人としては、上海にいた時に、羅克典、羅堅白というやり手の兄弟がいて、我々と接触していました。ところが、重慶から来た連中はみんな腹が減っていますから、日本人が残していった財産を元手にしてそれを金にかえて、ポケットに入れてしまう。それで金の所在がわからなくなって、けんかして帰って来たのです。でも二人とも良い人でした。

— 羅兄弟とは台湾でも接触があったのですか。

小崎 台湾ではなかった。

— 吳仲謀さんと羅兄弟とは何か関係があったのですか。

小崎 それは関係ないです。吳仲謀は軍人、羅兄弟は政府の人間です。

— 吳仲謀さんは台湾にいた時にも軍にいたのですか。

小崎 いたのかもしれない。病気だったから、やめていたかもしれない。

— 中国の情報は、どこから吳仲謀さんに入っていたのですか。

小崎 いろいろでしょう。我々はわからないけれども、彼らで独自の通信網があるのでしょう。蔣介石は大陸反攻一点張りで、それに反する政策は採ってないですから。それ以外に、台湾人の新聞社の人からずいぶん情報をもりました。情報の中身は、たいてい中共軍が台湾に対してどういう行動をとるかということ。いつ、どこからどう攻めてくるかわからないから、緊張して情報をとっていました。

— 吳仲謀さんが情報をくれたとのことですが、それはやはり台湾海峡危機の時ですか。

小崎 そうです。

— 大使と接触されるようになったのは、台湾海峡危機の頃からですか。

小崎 ええ、そうです。

— 第一次台湾海峡危機の時、台湾は、相当に危機感をもっていたのでしょうか。

小崎 台湾側はもっていました。中共に本気になってやられたらどうなるかと。金門島には、防衛陣地をつくっていましたからね。

— 台湾側には、アメリカはそんなに守ってくれないという気持ちがあったのですか。

小崎 いえ、アメリカは最大の味方です。

— ダレスあたりは爆弾を落とすくらいの発言をしていましたからね。

小崎 アメリカの協力は日本の比ではないですよ。軍事顧問団をつくりまして、兵隊がたくさん来ていましたから。そのアメリカが第七艦隊を出したから、中共は尻込みしたのです。ただ馬祖は中共に落されました。金門島は守りましたが。

— 日本の大使館では、米中戦争が始まるかのように感じていたのですか。

小崎 ええ。

— そうすると、日本としては板挟みになるのでしょうか。日本は当然、台湾を支持していましたが、貿易などの観点からしますと、大陸は資源も多いし、人もたくさんいますし…。

小崎 でも、まだ日本は大陸とはそんなに深い関係にはなかったですからね。あと、台湾には日本の商社がたくさん行っていましたから。その中に同文書院の連中もたくさんいた。私は台湾で大使館と商社の者を集めて同窓会をやりました。それから、台湾人にも同文書院の人間が4、5名いました。

— そこでもいろいろ情報交換できるわけですね。すごいネットワークです。ほんの10年くらい前まで、中国にいた方たちばかりでしょうから。

小崎 それは本当にそうですね。

— アメリカとの情報交換はなかったのですか。

小崎 やっていなかったです。

— 大使館として情報が入ってこなかったということですか。

小崎 そうです。

— ということは、国民政府から直接情報をとるしかないのですね。

小崎 そうです。国民政府と直接やりとりするにしても、私は入ったばかりのチンピラでしたから、向こうが相手にしてくれません。〔国民政府の〕課長クラスなんかは、相手にしてくれない。バカにしてるな、と思いました。

— 最終的には、東京も大使の情報は確かであると認めるわけですね。本省の方で情報の再確認をするのでしょうか。別の情報源で裏をとるとか。

小崎 それもあるでしょうけど、やはり現地からの情報はどうやって情報を手に入れたのか、ということが一番重視します。

— 当時の外務省には、複数中国関係者がおられたと思いますが、どんな方がいらっしゃいましたか。芳沢謙吉さんなどは戦後も活躍されますけど、基本的には戦前の方ですね。戦後に活躍された方でどんな方がおられるのかと思ひまして。戦後初期の頃の外務省の中国派の方です。

小崎 まずは市川修三さん。戦前に蘇州の領事をやっていて、私が外務省に入った時にまじりました。あと堀内干城さん。奈良県の人で、のちに外務省を辞めて参議院議員選挙に

出ました。

— 例えば、堀内干城さんは政治家になった後、外務省を応援してくれるものですか。

小崎 応援はしてくれます。私は接触したことはありませんでしたが。あとは、石射猪太郎さん。

— 石射猪太郎さんとは接触がありましたか。

小崎 息子さんとはありました。

— 1950年代くらいですと、中国と関係がある人というのは、戦前に中国にいた人とか、あるいは、大使のように同文書院関係の人が多かったと考えた方がいいでしょうか。

小崎 そうですね。

— 当時はまだ、中共支持者とか、中共と関係の深い方はあまりいないですよ。

小崎 そんなにいないと思います。

— 戦後的な中国派ができるのは後のことですか。

小崎 そうですね。田中角栄氏が72年に大陸との関係を正常化しましたが、それを助けたのが、もう亡くなったけれども、橋本中国課長〔橋本恕〕。

— 橋本さんと大使とは接触はあったのですか。

小崎 多少はありました。彼とは1年違いでした。

■ カルカッタでの初仕事—皇太子殿下の奉迎

— では、ここからは、台湾から一度日本に戻られて、インドに行かれた頃の話に入りたいと思います。インドに行かれるのは1962年ですか。

小崎 そうです。大使館ではなく、行ったのはカルカッタでした。総領事館です。

— 大使が希望されたのですか。

小崎 希望はしていません。ひどい所だろうな、と思って行きましたが、カルカッタはものすごく日本人が多くいた。商社の人やインドで一番多くいた。それから、現地では毎日タキシードを着ていました。みんなタキシードを着ているから、そうでないと格好がつかない。一度普通の服を着て出ていったら、馬鹿にされたから、これはタキシードを着ないといけないと思った。

— 社交が盛んだったということですか。

小崎 そうです。

— ちょうど、日本とインドが借款や技術協定を結んだ頃ですか。

小崎 ええ。行って最初に仰せつかったのは、皇太子殿下と妃殿下がいらっしゃるということで、そのお迎えでした。両殿下は、ご結婚された翌年にカルカッタに来られました。その時は日本人集落が全部を挙げて、皇太子殿下歓迎のセレモニーをやるという、頑張っていました。当時は、日本からの飛行機が最初カルカッタに着きました。それから燃料を補給して、ヨーロッパその他に行っていました。今は違いますけどね。それは大変でした、

初めての接待でしたから、総領事館内に班をつくりました。荷物班というものもありました。というのは、特に妃殿下の洋服とか着物がたくさん箱に入れられて送られてくるから。飛行機から荷物を下ろして車にのせて、宿舎に運んで並べておく。そういった仕事をして

いた。

あとは、食料班、それからエンターテイメント、見学その他を担当する班など、いくつか班をつくりました。総領事館だけでは足りないから、大使館からも応援が来ましたよ。それに日本人会でいろいろな班を作って御迎えしました。私は皇太子殿下と妃殿下のすぐお側でお仕えしました。到着されるのが夜遅くでしたから、ずっと寝ないでお仕えしました。だから今でも、天皇陛下は我々を忘れておられない。数年に一度、我々をご自宅の方にご招待くださる。当時の写真がたくさん飾ってあって、そこで一杯飲みながら、話しをします。陛下もお気楽に過ごしておられ、ああいった場合は肩ひじはらなくていいでしょう。

—— そういった形で陛下と対面される方は、すごく限られているようですね。美智子様はお綺麗でいらっしゃいましたか。

小崎 それはもう本当にお綺麗でした。

—— カルカッタは暑いんですよね。両殿下がきちんとした正装をされるのは大変でしたでしょう。

小崎 暑いです。だけど 11 月頃から冬になるのです。だから、そのころはそんなに暑くない。カルカッタには大きな屋敷があって、両殿下にはそこに泊まっていた。私は朝早くに、妃殿下とご一緒に庭を散歩して、「これは何々でございます」などご説明しました。

ところで、インドには、マシヤという珍しい魚がおりまして、それを送ってくれとインド政府に頼んだのですが、いくら言っても返事がない。その魚はヒマラヤの谷の奥の方から出てきまして、始めは小さい魚なのです。それが河を下ってくるにつれてだんだん大き

くなる。珍しいからインド政府に頼んだけど、どうしても捕まらない。それでヒマラヤの奥へ行って、探したけれども見つからない。それで、そのあたりにいた魚を捕まえる名人にお金を渡して、後で必ず送ってくれと頼んで帰りました。

その後半月くらいして、「今日送る」と電報が来て、夜の飛行機で送ってきました。バケツに入れてね。マシヤが何十匹もいるのです。それを箱に詰め替えて、日本に送ろうとしたところ、カルカッタには州の魚を扱う長官がいて、そこで許可をとらなければいけない。それで私が夜中に行き話したら、向こうが「何でお前が魚を勝手に捕るんだ」と言う。こちらも怒って、「何か月も前に頼んだのに何も言ってこないじゃないか」とけんかしました。まあ、それでも許可をもらえて、日本に送りました。

皇太子殿下が翌年に再度来られた時、そのお話しをしたら、あれは宮内庁と水産庁で分けて飼育したけれども、みんな死んでしまったとおっしゃっていた。がっかりしたけど、水が合わないというか土が合わないというか。そんなことがありました。

—— 天皇陛下は魚類がお好きですね。昭和天皇は植物学がお好きだったようですが。大使はシッキムとのお付き合いもあったようですね。

小崎 ブータンの西側にありました。今はインド領になっている。ネパールの間にあった。最初にブータンの首相と付き合ったのは、イギリスの女王が来られた時。お迎えに外交団全員が並んで出た。カルカッタの、インドの地方長官、州知事のような人の館にずらっと並んでお迎えしました。そこに女王が来られた。その時に、私のとなりに大きなおじさんがいた。日本人と同じ顔をして、どてらのようなものを着ていました。その人と話したら、おれはシッキムの総理だという。カルカッタに家を持っていて、時々来て楽しんで帰ると。遊びに来いよ、と言われたので行きました。奥さんと妹さんもいました。酒を持っていったのですが、歌でも教えてやろうと思って教えたりしました。

それから東京に行った時、女性の着物の浴衣生地を送ってもらって、それを二人分贈りました。非常に喜んでくれて、次に会いに行った時に着物にして着ていました。そんな経緯から、非常に親しくなった。そしたら、ブータンは鎖国状態になっているという。それはインドが閉鎖して、外国との交際はできないようにしているから。それは非常に残念なので、どこかの国の経済援助を受けたいので助けてくれないかと言われ、私が東京に伝えたら、返事が来て、専門家を出すことになった。当時プラント協会というところから、いろいろな人が7人くらい来ましたよ。

ついていけと言われたので、私もブータンの国境まで飛行機で行って、そこからジープ

に乗って上がって行った。そこまでは、我々はみんな登山服を着て、長靴をはいて、帽子をかぶって、馬に乗ってひっくり返って落ちても大丈夫な格好をして、現地調査に行きました。その時は、どうせ現地に行っても何もないだろうということで、出たばかりのインスタントラーメンをたくさん持って行きました。途中まで行くと、道はまだ工事中でした。そういう所を越えて、パローというところへ行きました。そこには我々みんなが泊まるような場所はないのです。それで野外にテントを張って、そこで出発の準備をする。馬をたくさん集めてきて、荷物を積んで、我々も乗って行きました。お風呂は川の水をくんできて、沸かして入りました。

それから地方へ出ました。私も馬に乗って行ったら、途中で落されましてね。四千から五千メートルくらいある崖から下をみると、危ない。中には帰ると言い出す人もいましたが、何とか行きました。とにかく平坦地があると野営して、水や道路がどうなっているかを何日か調査してまわりました。それでさらに資料をもらおうと思ったけれど、インド側が外国人には出さない。仕方ないから我々で資料を作って、外務省へ送った。何にもない所だから、道路とか水力発電とか農業を基本にして開発をやろうと外務省に言ったら、2、3年後になってから、外務省がOKした。その時に、私は間のいいことに、〔経済協力局〕技術協力課長をやっていた。その時には喜んで開発のための人員を現地に送りました。

そして、最初に我々を迎えてくれたドルジ総理が、私がインドからカナダへ移った後に殺されました。なぜかという、我々が思うには、ドルジは開発派で外国と提携して開発をやろうとして我々と手を握った。おそらく、外国との提携に反対する連中にやられたのではないと思う。彼は非常に立派な人で、残念なことをした。いずれにせよ、私にとって、ブータンというところは非常に思い出深いところです。

あと、当時カルカッタにいた総領事が東郷文彦さんだった。東郷家というのは、3代続いているのです。その2代目が総領事でいました。その東郷さんは非常にブータンが好きでした。それで東郷さんは、もし亡くなったらブータンに骨を埋めてくれと言って、ルーマニアかどこかで亡くなったのですが、奥さん〔東郷いせ〕がブータンに行って骨を埋めました。だから、私ももう一回ブータンに行かないといけないなと思っているのだけれど。

—— 東郷さんとはカルカッタでずっとご一緒だったのですか。

小崎 途中から〔1963年から〕東郷さんになりました。

—— ブータンとかシッキムは当時、中印紛争で大変だったところですよ。ドルジさん

の暗殺もそれと関係があるのでしょうか。当時はどういう状況だったのですか。

小崎 インドとパキスタンは2、3回戦争していますが、その間に中国とやったのですが、中共の方が強い。その時、私はたまたまゴルフに行っていました。帰りに飛行機に乗ろうと空港に行ったら飛行機が出ない。仕方なく、現地の会社が世話してくれた宿に泊まりました。インド人はみんな怖がっていて、中共にやられると言って大騒ぎしていた。我々は日本の旗を立てて、車に乗って街を歩くんだけど、それでもやられるかもしれない気を付けていました。最初は中共にやられたんですが、インド側がそれを押し返してもとの線に戻りました。

ブータンの話に戻りますと、シッキムとブータンは皇室同士、お付き合いしていたのですが、私はブータンの人とお付き合いしているうちに、シッキムの人と仲良くなって、そのうちにシッキムの皇太子が二度目の結婚をしまして、日本人と結婚したいといった。ところが、日本に頼んでもなかなか来る人がいない。そのうちに、アメリカ人の女学生が来まして、その方を見初めて結婚することになったからぜひ来てくれということで、63年の3月頃だったかな、私はカルカッタからジープに乗って行きました。ブータンのカリンボンというところに総理の別荘があって、そこに一泊しました。

そうしたら、夕方、アメリカ人の女子学生が5、6人来て、夕食を一緒にして、私たちと同じところに泊まりました。その後も彼女たちとは、結婚式が終わるまで付き合いしました。とても楽しかった。彼女らは、皇太子と結婚されるラドクリフの同級生たちでした。私が会場に行ったら、「そんな服着ていないで着がえろ」と言われて、中国服に似た民族服を貸してくれました。その時には世界各国からお祝いに多くの人 came ました。

それでお客さんを泊めないといけないということで、竹で家を建てて、みんなそこに泊まりました。私は幸いちゃんとセメントで作った家に泊まりました。そして毎晩お祝いです。最初の日には式があったのですが、それが終わって何をするかというと、庭に大テントがあって、ごちそうやシャンパンが山のように積んであって、たくさん飲みました。それから、ツイストだったかな、踊りを初めて教えてもらった。

少し話は飛びますが、その後、シッキムはインドにつぶされてなくなってしまいました。そして、その話をルーマニアにいた時に、ルーマニアのアメリカ大使に、夕食をごちそうになって一緒に飲んでいる時に話したら、その大使の奥さんが、シッキムの皇太子妃になった方は、シッキムがインドに取られた後、ニューヨークに帰ったと言っていました。子供も男の子が2人いるということでした。皇太子は亡くなっただけで、それで、

元皇太子妃は子供を連れてニューヨークに帰ったとのことでした。シッキムの皇室はなくなっていました。

— シッキムとは経済協力の話はなかったのですか。

小崎 それはないです。

— カルカッタの総領事館では、技術協力の仕事はあまりしないのですか。

小崎 技術協力はやりました。田園開発をやりましたよ。インド人というのは、教えてもそのとおりにやらないのです。日本から技術協力に来ている人が田んぼに入って、こういう具合にやるんだと教えても、インド人は、それを上からたばこをふかしながら見ているだけです。それで私は、こんなことをしていたら、いくら頑張ったって日本が教えたことが普及しないと思ってインド側に文句を言いました。文句を言われている間は「ふんふん」と聞いているけど、なかなかやらない。だけど、インド人でも、下の階級の人たちは一生懸命やる。それで立派な稲が生えて、米もできるようになった。そうすると、そこで初めてインド人は「日本の技術協力はすばらしい」と言う。私は「自分でやらないで見てるだけではだめだ」と言ったこともありました。

その他にも水力発電のダムを作ったりしました。とにかく、技術協力に関してはインドは中途半端でした。うまく意思疎通もできませんでしたし。

— 戦後の技術協力の歴史を見ると、最初に賠償を結ぶのはインドですね。だからインドは特別な国なのかな、とっていました。

小崎 それは、デリーの大使館でやっている。我々総領事館は、大使館がやったおこぼれで仕事をやっていました。

— 池田総理もいらっしゃったのですか。

小崎 来られました。

— カルカッタに日本人がいる関係でしょうか。

小崎 それもありますが、あとは飛行機の関係ですね。総理級の仕事だから総領事館が直接関与することはなかったですが。ただ、総理が来られた時の忘れられない話があります。現地にお寺があったのですが、お参りする時には裸足で上がらなければいけないということで、私が行って掃除をしました。そして裸足で上がらないといけないと池田総理に言ったら、総理はそうかと言って裸足で上がってくれました。それからスピーチもやっておられました。

— 池田総理が来られたのは63年頃ですか。

小崎 そうです。

— まだ病気が分かる前の時で、お元気の頃ですね。

小崎 ええ、そうです。

— ちょうど60年代には、日本の技術協力が少しずつ盛んになる頃で、池田総理も最後のインド、東南アジア訪問の際には、技術協力についてかなり言って回るのですよね。

小崎 そうです。

■カナダへの赴任

小崎 その後、私はインドからカナダに行きました〔1963年10月〕。とにかくインドとカナダは全然様子がちがう。インドは暑く、貧乏で、人が多い。カナダは広い、寒い、人は少ない。カナダはよかったですよ。

— 日本には一度も帰らなかったのですか。

小崎 いえ。カナダへに行く途中に寄りました。東京に10日間くらいいたでしょうか。

— カルカッタからカナダへの異動は、そろそろ大使にも欧米圏に行ってもらおう、ということでしょうか。

小崎 そうでしょう。

— 当時のカナダ大使は牛場信彦さんでよろしいですか。

小崎 島津さん〔島津久大〕に代わっていました。ところで、行ってしばらくしてから、カナダ人の現地職員であった女性が、涙を流して私のところにやってきた。それで「やられた」と言う。私が「何をやられた」と聞くと、ケネディが暗殺されたと。カナダ人が泣くくらいだから、ケネディというのはえらいものだと思います。カナダに行つてすぐの出来事でした。

— カルカッタにいた時には、アメリカの情報は入らないものでしたか。

小崎 いえ、新聞情報ですが入っていました。

— ではキューバ危機もカルカッタで情報が入ってきたのですね。

小崎 ええ、知っていました。

— 当時のカナダは、イギリスよりはアメリカとの関係が強かったのでしょうか。

小崎 そうです。

— 当時のカナダの総理大臣は誰でしたか。

小崎 ピアソンです。

— カナダ大使館ではどういうお仕事をされていたのですか。

小崎 文化広報と政務の一部です。文化広報は非常に忙しかったですよ。カナダ人は日本人のことをあまり知らないもので。日本の宣伝のために、あちこちに行ってくれということでした。キワニスクラブとかロータリークラブなどです。それから、教会、学校など。あと、カナダ側から日本の話しをしてくれという依頼がよくきました。大使館には映写機フィルムがありまして、文化広報でそれを使います。それを持って行って映像を見せるわけです。だけど、それでは全部はわからないから、話をするわけですが、わかってくれることもあるし、わかってくれないこともあるし、いろいろありました。大使も頼まれて話をされていました。細かいことは、私が全部請け負ってやっていました。

— カナダ側が日本のことを知りたいというのは、どういう理由だったのでしょうか。

小崎 それは日本が急速に発展したからでしょう。その秘密を知りたいというわけです。これこそ我々の望むところということで、何か要望があればすぐにすっ飛んで行って話をしましたよ。とにかく「知りたい知りたい」という希望が強かった。キワニスクラブやロータリークラブで食事が終わるとそこで話をします。あるいは映画をみせる。映画を見せずに話だけのこともありましたが、非常に喜んでくれた。とにかく日本が戦後、うなぎ登りに上昇する過程をたどって、工業化を続けていったのは、驚くべきことであるとカナダ人は思っていた。具体的に言うと、大阪の松下電器とか、ソニーとかいろいろあったけど、カナダ人は大したものだと言っていた。

カナダ側からのリクエストはあったけれども、私は大使館の人間だからひとりでそんな〔経済的な〕話はできない。そこで、たまたま日本から来ていた英語のうまい留学生に頼もうということになった。日本のフィルムと映写機を貸しまして、西はバンクーバーから東まで全部行かせました。

— その留学生のお名前は覚えてらっしゃいますか。

小崎 名前は出てきませんが、日本の自動車会社の人でした。今も御健在かどうかは存じません。彼は日本で就職活動もしないで、カナダでその自動車会社に入った。今でもよく走っている自動車会社ですが、どこだったのでしょうか…。

— カナダにおける日本のイメージは、いかがでしたか。戦争の影響はなかったのでしょうか。

小崎 悪くない。戦争の影響も全然なかった。あの頃は、向こうの人に見れば日本人

も中国人も一緒でしたよ。私はよくカナダからアメリカまで車で旅行しましたが、どこだったか海岸沿いの場所で、現地の人が「お前どこの人間だ」と聞いてきた。それで「ジャパニーズだ」と言うと、現地人はジャパニーズもチャイニーズも分からないですから、「あれは大きな国だなあ」と言う。そこで「そんなに大きくないよ、日本は小さい国だ」と言うとみんなびっくりしていました。そういう人たちがいるくらいですから、よく知られていなかったですよ。

カナダでは冬はスキーもしました。夏はゴルフです。一度カナダへいらっしゃったらいいですよ。いい国です。人がいいです。

—— 当時の日本とカナダの外交関係は、それほど活発ではなかったのですか。

小崎 いえ、外交関係は普通でした。

—— 政務の関係でご記憶に残っているお仕事はありますか。

小崎 それは毛沢東が文革をやっている頃のことです。それを日本の新聞はたまにしか書かないけれど、現地カナダの新聞はよく書いていました。カナダの特派員が中国に行っていて、その情報が新聞に載るのです。それで、文革の事情がよくわからないものだから、私はカナダの外務省に聞いて教えてもらっていました。それでもよくわからなかった。文革というのは、中国人自身ですら何をやっているのかよくわからないものだった。私が日本に帰ってからもしばらく続いていました。日本でも〔報道するのは〕壁新聞くらいでして、同文書院の連中が、朝日・毎日・読売など新聞社に入っていたから、壁新聞を書くのはみんな同文書院の連中でした。他の人は中国の事情などわからないのです。そこで同文書院の人たちが活躍したわけです。その頃は各地の大使館、領事館に同文書院出身者がいまして、お互いよく知っていますから情報がとれた。特に北京にいた同文書院の出身者が壁新聞を書いて、後で表彰を受けました。ボーン賞ですね〔伊藤喜久蔵、1967年ボーン国際記者賞受賞〕。

—— ちょうど60年代は、自民党内も親中派や親台湾派に分かれていましたし、研究する側としてはとても面白い時代ですが、激動の時代ですね。北爆も始まりますし。

小崎 そうですね。

—— カナダ大使館には経済班はあったのですか。

小崎 ありました。農林省の人間が来ていました。あとで通産省の者と代わりましたが。カナダ大使館は、大使室と参事官室、一等書記官が3名くらいいたかな。私が行った時は二等書記官だったと思います。

—— 同僚で覚えている方はいらっしゃいますか。

小崎 同僚は、和知一夫さん。1年上の方で、私はその方と交代で行ったのです。日本に帰ってきて、賠償課にいて、そのあとまた通産省に出向したのですが、その通産省で引き継いだのが、彼がやっていた日米繊維交渉の仕事でした。繊維交渉というのは延々と続いていましたからね。

—— 大使が繊維交渉を引き継がれるのは途中からですか。

小崎 そうです。私の時に全部終了しますが、それまではずっと続いていました。非常に苦勞しました。

—— ではカナダでその方のお仕事を引きついで、通産省でも引き継がれたわけですね。

小崎 そうです。

—— 宮沢喜一元首相に生前話しを聞いたことがあるのですが、宮沢さんは繊維交渉に関わられていました。大使は田中角栄通産相の時ですね。宮沢さんの時にまとめることができなかつたのが、田中さんの時にまとまった、大変な交渉でしたね。

小崎 繊維交渉は日米間の大きな仕事でした。沖縄と関連していましたし。

—— 大使にお話しをお伺いする前は、ずっと中国畑でご活躍されていたと聞いていたのですが、途中から経済外交の最前線で仕事をされるわけですね。何か理由があるのですか。

小崎 ないです。何となくですね。外務省にいる人間は何でもやらなければならない。例えば、ブータンで登山服着ている姿などを「こんなことやっているよ」と見せると、家の者はびっくり仰天しましたよ。外務省の人間がこんなことやるのか、と。

—— 我々はこの時代は高度成長時代で、日本は勝手に成長して行ったかのように思っていました。今日のお話しを聞いて、山奥を開発するにあたり、探検隊のように命がけで調査しておられた経緯などは、これまで想像が付きませんでした。お話しを聞かせていただいてリアリティが出てきました。

小崎 ブータンの総理がまだ元気だった時、パローで調査旅行に行く準備していた時の話があります。ある時、「今日はお祭りがあるから出てこい」と言う。それで行くと、みんなが踊り子の服装をして、お面をかぶって踊っていました。それを見て、こんなところあるんだな、と。まあ、普通の日本人はそういった場面にお目にかからない。

—— 我々はシッキムのことなど言葉の上でしか知りませんからね。それを大使は実際に行かれて、お付き合いもあったわけですから、すごいですね。

今日もアイゼンハワーやケネディのお話しが出てきましたけれど、ケネディの後、アメ

リカがベトナム戦争に本格的に関与するわけですが、それもカナダにおられた時ですね。

小崎 そうです。

— カナダにも反戦運動はあったのですか。

小崎 ええ、ありました。その頃は、東西関係が鮮明で、あと白人と黒人が対立していました。アメリカにはよく旅行に行きましたけど、食堂には黒人は入れない。バスに乗っても黒人と白人が分かれています。そういうのがはっきりしていましたね。

— アジア人は白人、黒人のどちら側として扱われていたのですか。

小崎 白人の側です。あのころのことを思い出すと、よくこの問題を克服できたな、と思います。

— アメリカの中では、東西だけではなく国内の人種の問題もあって、日本でも学生運動があった時代で、安保闘争などもありました。その頃は日本にはいらっしやらなかったと思いますが、日本の様子は情報として入ってくるものですか。

小崎 新聞情報ですね。数日遅れの新聞で知りました。だけど、外務省には第一速報として、別に外務省用のテレックスで入ってきました。大事なことはそれで毎日知らせてくれた。それを見ればわかりました。

— カナダの対日感情はよかったとのお話しでしたが、インドはいかがでしたか。

小崎 インドもよかったですよ。

— 戦争の影響はなかったのでしょうか。

小崎 ええ。インドはご承知のようにパール判事が東京裁判で—この方はカルカッタ出身ですが—パール判事だけです、日本を無罪と言ったのは。そういうことで、インドは昔から日本とは関係がよかったです。

— 大東文化大学の生田滋先生が、チャンドラ・ボースの史料を入れてくださって、ボースが戦前日本にいて独立運動をやっていたころの、犬養毅からの書簡や、松本楼で日本の支援者と撮った写真などを図書館で公開しています。チャンドラ・ボースはインドではどう評価されているのですか。

小崎 ものすごい人気ですよ。私が行ったころは、もうチャンドラ・ボースは死んでいましたが、絶対まだ生きています。日本でまだ生きていますと現地の人は思っていた。カルカッタ地域の人たちは、ボースは日本で生きていますと信じていました。絶対に日本から帰ってくると。彼の命日になると、みんなでお祝いしていただくくらいです。だから、ボースは亡くなったと言っても信じません。それくらい信望がありました。

ボースは立派な方ですね。カルカッタでボースと一緒に仕事をしたという、国塚一乗という日本人がいました。その人がシンガポールにいたときに、ボースの秘書になりました。もともとボースはドイツにいました。インドからドイツに逃げて、ドイツから潜水艦に乗ってインド洋を越えて日本に来る。それで日本の潜水艦が途中まで行って彼の引き渡しをうけた。そしてシンガポールに連れていった。そしてシンガポールでインド独立編成軍を作ったのです。

それで国塚さんは陸軍中尉として、ボースの参謀になって、シンガポールからインパール作戦をやりました。作戦は失敗して、ボースが途中で引き返してきた。日本軍はネパールでの戦争が危なくなると、上官がまっさきに逃げてしまった。でもボースは一ネパールは川が多いのですが一川の岸辺で待っている。何を待っているかという、自分の部下が全員集まってきて、船に乗って対岸にわたるのを見届けてから逃げるのです。立派な人ですよ。それは『インド洋にかける虹』という本に詳しく書いてあります。私は国塚さんから直接聞きましたよ。ボースの話しをよくしていましたから。

—— 時間が過ぎてしまいましたが、次回は繊維交渉のお話しをさせていただければと思います。あともう1回だけお付き合いいただければと思います。本日は本当にありがとうございました。

（以下、次号に続く）